

中米帰国研修員活動調査報告 <その1>

2012年12月、中米の国エルサルバドルとニカラグアにおいて、JICA 筑波で実施している野菜栽培技術コース研修員の帰国後の活動調査を実施した。2週間にわたり2カ国で各4名、計8名の帰国研修員の職場を訪問し、彼らが研修を通じて身に付けた知識や技術を如何に活用し日々の業務に取り組んでいるかを詳細に知ることができた。本シリーズでは帰国研修員の活動状況を4回に分けて報告する。第一報である今回は序章として、帰国研修員活動調査を実施した背景について報告する。

ODA における人材育成支援は重要なテーマである。当社もまた人材育成を重要な事業のひとつとして捉え、長期専門家派遣や技術協力プロジェクト等におけるカウンターパートへの技術移転、農家や地域住民への技術普及のための研修業務等を実施している。2001年からはJICA 筑波が直営で実施している栽培技術研修事業を受託し、参加した普及員・研究員および教員等の能力向上のための研修を実施している。これまで野菜分野・陸稲分野において8コース220名の研修員に関わってきた(2013年現在:野菜分野159名、陸稲分野61名)。しかしながら本邦研修では、その研修成果をどの様に把握し、評価するかが課題としてあげられる。

2005年以降、JICA 筑波では研修成果の一つとして、帰国後のアクションプラン作成を研修カリキュラムとし、さらに帰国後に所属先で再検討・改訂したアクションプランの報告を取り付ける事後プログラムが設けられた。しかしながら帰国わずか3ヶ月後の研修員に報告を求めても、研修成果が帰国後の活動に与えるインパクトを確認・評価することは困難であり、中々期待した成果が得られていないのが現状である。

当社では研修業務の内容向上を常に検討しており、2005年にはボツワナ、2010年にはマラウイ、ザンビア2カ国で10名の帰国研修員を訪ね、活動状況の把握と支援を目的としたフォローアップ調査を実施した。いずれの調査でも帰国研修員の意欲的な活動が見られ、本邦研修の成果が帰国後の活動に与えるインパクトが確認された。また同時に帰国研修員が抱える課題も確認された。これら得られた結果は研修業務の質的向上に反映させるよう取り組んでいる。

第3回目となる今回の中米調査のきっかけは2012年10月にエルサルバドルの帰国研修員ルイス氏から届いたアクションプラン進捗レポートであった。レポートには詳細なプランの実施状況と日本で身に付けた知識・技術の活用事例が報告されていた。そのためルイス氏の活動を調査することでアクションプラン実施と研修成果の活用のポイントを明らかにするとともに、必要に応じてルイス氏の活動をフォローアップするための事前調査をすることができないかと考えた。

また2013年2月から新たなスキームで始まった野菜栽培技術コースでは中南米諸国を対象としなくなったが、当社が野菜栽培技術コースに関わり始めた2005年以降中南米諸国からは毎年研修員が来ており、計16名を受け入れてきたことから、中南米地域への研修成果をまとめる良い機会であると考え、現地調査を実施することとした。調査国は中南米地域で帰国研修員が最も多いエルサルバドルとニカラグアの2カ国とした。

野菜栽培技術技術コース 地域別研修員数(2005-2012)

アジア	大洋州	中南米	アフリカ	中東	合計
40	10	16	18	2	86

注釈:本文中では「野菜栽培技術Ⅱ(2005~2009)」「小農支援のための野菜栽培技術(2010~2012)」および「小農支援のための野菜栽培技術とマーケティング手法(2013~)」を合わせて「野菜栽培技術コース」と表記している。

今回の中米帰国研修員活動調査では、本邦研修の活用状況を確認・評価・分析し、今後の研修業務へ反映させる(フィードバック)、および意欲的な帰国研修員の活動支援の可能性を探る(フォローアップ)の二点を主たる調査目的としている。

次号以降3回にわたって訪問した全8名の帰国研修員の意欲的な活動と本邦研修で学んだことを活かすための創意工夫の具体的な事例を紹介するとともに、現地調査によって、見えてきた問題点や改善点についても詳細に報告する。



インタビュー風景と活動地域の調査風景